

ことば・その障害と諸事情

伊 東 節 子

明倫短期大学 歯科衛生士学科専攻科 保健言語聴覚学専攻

Approach to Speech and the Disorders

Setsuko Itoh

Department of the Communication Disorders, Meirin college

話しことばとその障害・治療に関する記述は他に多々みられることから、今回はこれに関連する周辺の事情として、1. 日米間のことばに関する意識の相違、2. 食生活とことば、3. ことばとパーソナリティ、4. 言語治療・施設の誕生、5. 脳機能に対する考え方の今昔について、私見を交え述べた。

キーワード：話しことば、構音障害、肥満、情緒不安、言語中枢

Keywords：Speech, Articulation disorders, Fatness, Emotional instability, Speech center

1. はじめに

言語障害・治療を取り扱う分野は「言語病理学」、
「言語障害治療学」など、従来より種々の呼称が用
いられており、また言語治療に携わるものの呼称も
言語治療士、言語臨床家あるいはスピーチパソロジ
スト、スピーチセラピストなど種々にみられた。但
し、言語病理学の先進国であるアメリカにおいて
は、修士号所有を原則に“スピーチパソロジスト”
(speech pathologist)の呼称¹⁾が許され、他は主に
スピーチセラピスト(speech therapist)が用いら
れている。

我が国では、1997年12月19日に言語聴覚士法が成
立・公布(1998年施行)され、国家資格制度の成立
に伴い、この専門分野を「言語聴覚学」、同専門職
を「言語聴覚士」とする呼称に統一された。これに
は、1960年前後からの長期間言語治療分野に携わっ
てきた者達の知識と経験の積み重ねが貢献した。

こうして最初の国家試験が実施され、1999年には
4003名の言語聴覚士が誕生した。養成校も47校²⁾と
急上昇に増加したが、「言語聴覚士」の免許を持つ
ものは2005年現在1万名には達していない。このよ
うに本分野では言語聴覚士数は未だ少なく、また国

家資格を得た現在もなお関係者間以外では、周知さ
れているとは言い難い。

そこで本稿では、「ことばとその障害」に視点を
おきつつ、これに関連するその周辺の諸事情につい
て紙面の許す限りのべてみたい。

2. 日米間のことばに関する意識の相違

日米の母親における幼児に対する意識調査³⁾のな
かで、“何歳で自分の考えをきちんと主張できれば
よいか”という問いに対し、“4歳までに”という
答えがアメリカの母親の回答では36%、我が国では
僅か6%であった。

日米の母親間にみられる「ことば」に対する家庭
教育レベルにおけるこのような意識の相違は、アメ
リカ社会において「ことば」が社会生活に大きな影
響を及ぼす要因であることを物語っている。

すなわち、その社会においていちおう標準と認め
あっている「話しことば」を用いられることが就職
や交際関係にも影響を及ぼし、階層を示す1つのシ
ンボルともなりうる社会的意識構造にその要因の1
つがあることが推察される⁴⁾。

このことは、同一社会における母国語の異なる民
族間における交流では曖昧な話し方や不明瞭なこと

ばでは情報交換に際し、誤解を生じることも少なくないことが窺える。たとえそれが小さな誤解であっても、時には安全性にも関わる重大な問題に発展しかねないこともあるであろう。他にも理由はあろうが多民族の集合体で人的構成の複雑なアメリカ社会では、適切なことばを用い、意思表示がきちんとできることが社会生活を潤滑に、しかも安全に遂行できる意味においてもっとも重要な要素であった。したがって、ことばを明瞭に話せることは“生きていくうえで”必要条件であったことが推察される。それが伝統的習慣となり、社会的コンセンサスにいたり、家庭教育においてもことばに対する意識の高さとなって現れたものと考えられた。

一方、我が国においては“腹芸”、“以心伝心”、“目でものを言う”など演劇や禅宗などで用いられていることばが一般化されていることでも理解されるように、意思伝達の方法において、あからさまなことばで意思全部を伝えるよりは、むしろことばを省略し、態度や目、心で伝え合うという風潮がみられた。

この日本的風潮は、周囲を海で囲まれ、外部からの襲来の可能性が低く、しかも狭い国土で、単一民族で構成された社会では、ア・ウンの呼吸で通じあえたことも要因のひとつと考えられる。また、奥ゆかしさが尊重されるという我が国の伝統性、国民性によりこのような伝達方法が許容され、存在した点も考慮に入れられよう。

これは21世紀にいたる今日の社会においても尚みられ、意思伝達におけるこのようなあいまいな表現は外来者からみると違和感、不十分な表現としてうけとられ、批判的にみられている。

中国からの留学生が経験した日本語の試験問題を紹介したものによれば、「“ちょっと暑いね”と上司に言われた場合の正しい答えは“部長、窓を開けましょうか”であった」と驚いていた。「中国でなら“暑いね、窓を開けなさい”とその要点を明確に直接的に表現する。日本には以心伝心ということばがあるが、伝えたい内容はことばにしないとわからない」と明言していた⁵⁾。

この“曖昧表現”は、話しことばだけでなく書きことばにおいてもみられる。ヘンリー・キッシンジャー教授は、かつて米国国務長官時代に我が国の政府要人と折衝した際の状況について読売新聞に連載していたコラムの記述文の中で、「日本の報告書には書かれた文字よりも、行間に存在する意味がむしろ重要であり、これを読み取る必要があった」と

して、日本人のコミュニケーションの複雑さ、曖昧さをいみじくも指摘していた。同氏は他にも自著などにおいて同様の指摘を行っている^{6, 7)}。

このような曖昧表現に関して、最近ようやく日本人の間にも改善の必要性があることをおおいに意識している発言がある。本年9月のテレビ番組で、政府関連の内容について「はっきり言うべきことを言わない」⁸⁾ ことについて批判する発言があり、また新聞紙上においても、「アメリカ社会では学問的な論争で相手を理論で追い込む弁舌は鋭い。あいまいさを好む日本の感覚とは違う」⁹⁾ という記事がみられる。

これらにもみられるように、今や情報伝達面において意識の変換が迫られていることを表わしている。そこでこの解決策として考えられる1つに、昨今以前にも増して盛んになってきている外国語習得熱がある。このことは、日本人のことばの曖昧さを特徴づけるひとつの要因は主語が不明確である点が考えられる。この“主語”を明確に表現する外国語構文の習得が“話し方”を改善する方法としては1つの要素となろう。これは同時に留学、海外派遣、海外旅行、ワーキングビザ制度などで外国におけるコミュニケーション経験者が増加することにおいて、また“デイベート”が日本にも定着する観がある昨今、これにより“聞く力、話す力”を養うことで、日本古来の“曖昧表現”から脱却することもほど遠くはないであろう。

こうして、自分自身の意見、主張、判断が明確に表現できてこそ、国際社会においても十二分に活動が可能となるのである。

3. 食生活とことば

少子化傾向がいよいよ顕著になった。これは出生率が死亡率を下回ったことを本年(2005)9月、NHKによる放送で周知された。このことは高学歴偏重主義にさらに拍車がかかりよりよい学校への入学を目指しそのために必要な家計援助のため、あるいは子育てに要する時間が少なくなったこと、QOLを高めること、余暇活用の意識が高まったことなどにより、パート勤務などで母親の家庭不在化を生じた。

これにより、母親の多忙化に伴い調理済み食品やファーストフードの利用の増加などにより母親の手料理の減少、あるいは父親の勤務状況、子どもの塾通いなどで食事時間が揃わないなど家族揃って食事

をする団らんの減少化など、成長途上の子どもの「食環境」に大きな影響を及ぼしている。

すなわち、アンバランスな食事による偏食・栄養の偏り、軟らかい食べ物を好む傾向の増大、食生活上におけるマナーや噛むことの重要性を教育するチャンスが減少している。その結果、よく噛まない傾向は肥満、情緒不安、歯列・咬合異常、そして自浄作用の低下を生じ歯科疾患を引き起こす。さらに噛む運動不足は舌運動の異常学習を生じ、このことが構音障害を起こす要因ともなる¹⁰⁾。

一方、メディアによる育児に関する過剰情報や母親による他児との成長の比較からか、子どもの保育・成長に対して意識過剰となり、そのためか口腔機能能力、歯の成長に相応しない離乳食形態をとることがある。それが子どもにとってその後の固形食摂取に対する不適応、軟食嗜好を誘因し、噛まない習慣を引き起こす要因の1つとなりうることもある。咀嚼機能は、肥満、情緒不安との関連などで重要な因子であり、そのため多くの研究者による報告¹¹⁻¹⁷⁾がみられる。“情緒不安”は、特に昨今、若年層の凶悪犯罪要因の1つとしても推察され、由々しい問題として考えられる(図1)。

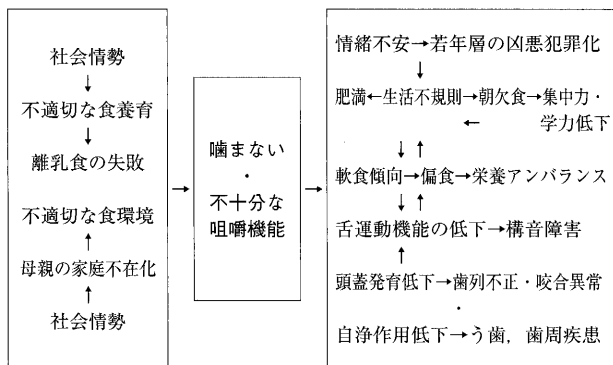


図1 咀嚼機能とその影響

他方、成長途上の青少年層によるテレビゲーム、就寝前の携帯電話使用などにより睡眠不足をきたす要因、あるいは数多くの塾通い、外遊びをしない、身体を動かさないなど運動不足を起こす不適切な生活があり、これが食生活の乱れを生じている。

ある高等学校生徒の睡眠時間の調査¹⁸⁾では10年前と比較すると約1時間減少し、平均睡眠時間は5時間32分である。また3歳時の場合では、1980年には22時以降に就眠する割合は約2割であったのに対し、2000年の調査では約5割に達していた¹⁹⁾。成長途上の子どもの場合、特にこのような不規則な生活状態は自律神経に変調を来し、食生活、体温、ホル

モン分泌など、生体リズムを狂わしかねない。

その結果として、食生活の基盤でもある朝食の未摂取という現象がみられる。これについて研究したもののよれば、朝食を摂取した場合としない場合とでは、学業の成績は前者の方がよかったとする結果が出ている²⁰⁾。

このことは朝食が成績向上をもたらすというよりは朝食を摂取するという規則正しい生活が良い結果をもたらしたと考えられる。すなわち、朝食を摂取しない場合、血糖値の低下を起こし、頭がスッキリせず、午前中の学業への集中性が低下するなど、これが学業に影響を及ぼす要因となることが考えられる。

17、8年ほど前、歯科開業医から「最近“噛めない、上手に話せない、発音が下手”と訴えて受診する患者が少なくない。そのため言語に関する基礎知識を把握したい」とのことで、筆者はレクチャーを要請された経験がある。これは前述のような幼少時からの不適切な食生活、すなわち不十分な咀嚼や咀嚼機能の低下がその要因の1つであったことが推察される。

このことは“ことばがはっきりしない”、“発音（構音）が不明瞭”と訴えて言語治療室に来院する子どもでは、問診の際“食物をよく噛まない”、“食べるのが速い”、“やわらかい食べ物しか食べない”などの食生活や咀嚼機能に問題があることがみられることで容易に推察されるものである。

以上、食生活の乱れや咀嚼機能の低下は、構音、肥満など個人の問題のみにとどまらず、社会問題をも引き起こす重大なキーが隠されていることを認識する必要がある、これらを助長する要因の排除に関心を払うことが緊急課題である。

4. ことばとパーソナリティ

社会情勢が目まぐるしく変化し、複雑化してくると、情報伝達に際しては明瞭に、適確に、迅速に行う能力がさらに必要とされる。

この情報伝達の方法においては“話しことば”に勝るものはない。

都市人口が過密になり、人と人との接触が多くなると必然的に軋轢が生じる。また、最近では話しことばよりも“書きことば”に依存する手段も多く用いられ、そのため不十分な意思伝達やまたこのことから誤解が発生しやすくなる。これらの解決策には当事者同士が直接出会って相手の目をみて話すとい

う“話し合い”が効を奏する。これを裏付けるエピソードとして、本年10月26日午前、NHKのラジオ番組で劇作家の平田氏が話していたことばのなかに「韓国の劇作家とお互い不明点をメールで交換しあうがなかなか通じ合えない。でも会えば（会って話せば）すぐわかるんですけどね」ということばが印象的であった。インターネットによる情報網がこれだけ張り巡らされても、国際会議が盛んに行われ、また映像を介した遠隔会議やテレビ電話などが発達する所以はこの辺の事情を物語る。

したがって、情報科学によるこれらの発達・発展は、情報伝達により生じるであろう諸問題の解決策の一助となるであろう。

しかし話しことばを用いた情報手段では、TPO（時、場所、状況）を考慮した“適切な話し方”が必要となってくる。1970年代当時、“話し方教室”が民間でもさかんに開講され、放送機関においても“上手な話し方”に関する啓蒙番組が生まれ、長年継続された。

ところが、歴史は繰り返されるとおり、30年後の今日、日本語、あるいは話し方に関してふたび高い関心がはらわれている。これは特に本年に入り、放送界そして出版界でも盛んにみられ、関連書物の出版が増加している²¹⁻²³⁾ ことでも知られよう。

NHKのTR（トップ・ランナー）という番組にロックバンドの1つである“氣志團”が出演していた。その際、一人の若い参加者がそのバンドリーダーである綾小路翔氏に「あなたはどのようにことに魅力を感じますか」という質問をした。それに対し、質問者と同世代とみられるバンドリーダーは「若い人たちが敬語を使っているのをみるとかっこいいと思う」と答えていた²⁴⁾。このことから、ことばが乱れていると一般には考えられている若い人たちの間でさえ、“美しいことばは良い”と認識されており、相手により感情をもたらしものであることが理解されている。

すなわち、話すという行為は、意思伝達手段として単に優れた方法であるだけでなく、その話し方において、話し手の感情、性格、教養、環境までもを表すものであり、個人のパーソナリティの表出に関連する人間の諸機能のなかでももっとも高次の機能なのである。

では、話し方やことばの機能に障害がある場合にはどのような対策が講じられなければならないかという課題が次に提案されなければならない。

5. 言語治療・施設の誕生

1900年初期、我が国では吃音、ろう、難聴などに伴う言語障害の治療が、主に耳鼻科領域と2、3の小学校で実施されていた²⁵⁾。

しかし、今日、我が国における言語障害・治療における方法は、そのほとんどが戦後になってアメリカから入ってきたものである。

言語障害の治療において臨床、研究、教育ともに先進国と考えられ、スピーチ・サイエンス（speech science）が確立しているアメリカにおける言語治療の発達を推進した発端は“国語教育”である。前述したごとく話しことばの適切性が重要視されるアメリカの社会情勢では、言語障害の認められる児童に対する対策がその動機となった。

1919年頃、アメリカでは言語障害への対策気運が高まり、言語障害・治療に関する研究と治療を担当する教師の養成機関が4年制大学における文科系に設置された。そして多くの専門分野にまたがった言語治療に関連する科目を「言語病理学」として1つの独立した講座にまとめたことが、今日の発展につながった²⁶⁾。アメリカにおける言語治療の実施は児童の話しかた教育の一環として主に公立学校で行われている。しかしもちろん、大学、病院他、関連機関における活動が隆盛であることには論を待たない。

我が国もアメリカに準じ、大学、病院・関連機関の他に、学童を対象として小学校における「言語治療教室」が言語障害の治療分担を果たしてきている。ちなみに、言語治療機関の経年的設置状況をあげると、1961年当時、わずか17施設であったのに対し、1973年時には741施設となり、10年余の間に約28倍（表1）に増加していた⁴⁾。

表1 言語治療施設の経年的増加数

| 調査年 | 施設数 | 調査年 | 施設数 |
|------|-----|------|-----|
| 1961 | 17 | 1968 | 293 |
| 1962 | 24 | 1969 | 364 |
| 1963 | 51 | 1970 | 475 |
| 1964 | 87 | 1971 | 475 |
| 1965 | 131 | 1972 | 741 |
| 1966 | 131 | 1973 | 741 |
| 1967 | 237 | | |

小学校言語治療教室、難聴学級、大学、治療センターを含む（NHK、吉川氏協力）⁴⁾

現在、言語治療機関は、言語聴覚士養成機関とともに量的には経時的に増加の一途をたどっている。今後は、質的面のいっそうの充実、発展のために有資格者における卒後教育、そして臨床、研究面の充実をはかることが重要である。

6. 脳機能に対する考え方の今昔

漢方、鍼灸など有効な治療方法を研究・発展させてきた伝統ある優れた中国医学では、清朝末期、思考と身体機能は心臓が担うと考えられていたらしい。しかし西洋ではこの時期、脳には5つの分野があり、身体機能と神経系は脳によりコントロールされていると考えられていたようである。したがって、当時、中国広州において開催された国際医学会の席上、参加している中国の医師達にその誤りを糾す西洋の医師からの発言があった²⁷⁾。といっても、これは映画の1場面であり、中国実在の人物で、医師であり、しかも中国武道において広州10指の一人としても名高い中国最大のヒーローとして今なお中国人民の記憶にある黄飛鴻（ウオン・フェイホン）がこの医学会に招聘され、これも医師で革命家・政治家である孫文と出会うシーンのなかでのひとこまである。しかし、これは映画の話であるからといってあながち一笑に付せない根拠がある。

すなわち、1807年すでにGallが脳の一定部位に言語機能が存在することを明らかにしていたことを考慮すると、西洋ではこの時期すでに脳機能に関してかなり進んだ研究が行われていたことが推察され、経時的にも符合する。

その後言語野の損傷により生じる失語症の分析から、1861年、Brocaは言語の運動中枢と呼ばれる分野を発見し、1874年にはWernickeが感覚中枢と呼ばれる分野を確認した。このように脳機能の研究においては東洋より西洋が勝っていた。さらに1959年にはPenfieldとRobertsが、てんかんの治療過程から3つの言語野を提唱している。彼らの提唱する前言語野、後言語野の部位は各々 Broca, Wernickeの部位と一致し、補助言語野に相当する上言語野は彼らにより始めて提唱された部位である²⁸⁾。これらの役割では、Brocaの言語野はことばの表出、Wernickeの言語野はことばの理解面を担うというのが定説となつて久しい。

脳の解明はこの10年間で急激に進み²⁹⁾、言語野に関してもその役割については、最近メディアでもしばしば氏名が見聞きされる川島³⁰⁾によれば、それぞ

れが協調しあい、特に前頭前野の役割の重要性が提唱されている。

ちなみに川島³⁰⁾は、さらにこの研究成果から、認知症発症の予防あるいは軽減に、簡単な文の音読や一桁程度の加算などが有効であることを提唱している。

7. おわりに

言語障害あるいは治療に関する直接の記述に関しては、本誌³¹⁾あるいは著書³²⁻³⁴⁾他ですでに多々記述しているため割愛した。

本稿では、話しことばとその障害に関連する諸事情について、社会情勢、食生活など周辺の事情をふまえ、言語治療の発達過程などとともに記述した。

引用文献

- 1) 伊東節子：ハーバード大学・小児病院における口蓋裂患者の言語治療を研修して。歯界展望, 85: 972-976, 1995
- 2) 夏目長門, 他：言語聴覚士をめざすひとのために。編集；夏目長門, 高見 観, 第1版, 引用部分文末付録によりページ記載なし。ネオ・メディアク, 名古屋, 2003
- 3) 東 洋, 柏木恵子：日米幼児教育研究の解説。日米幼児教育研究資料 (0.3) 1976年1月
- 4) 伊東節子：言語障害の臨床 (1) —子どもの言語障害—。クインテッセンス・ジャーナル, 1: 53-65, 1977
- 5) 山家誠一：ラジオアングル —違い楽しめる留学生座談会—。P23, 朝日新聞, 2005年9月14日
- 6) H. キッシンジャー：キッシンジャー激動の時代 (2) 火を噴く中近東。訳；読売新聞・調査研究本部, 監修；桃井真, 375-389, 小学館, 東京, 1982 (読売新聞社読者センター, 山内真弓氏協力)
- 7) 読売新聞社編：世界は変わる—キッシンジャー・中曽根対談。121-139, 読売新聞社, 東京, 1990 (読売新聞社読者センター, 山内真弓氏協力)
- 8) 報道ステーション：テレビ朝日放送局番組, 2005年9月19日放送
- 9) 四ノ原恒憲：“ひと” 藤原帰一氏, 「平和のリアリズム」で石橋湛山賞を受ける。P2, 朝日新聞, 2005年9月29日
- 10) 伊東節子：口蓋裂患者の言語障害と治療。第1版,

- 24-31頁, クインテッセンス出版, 東京, 1983
- 11) 朝日新聞記事: かみしめてほしい, 噛むことの大切さ, 日本咀嚼学会設立を機に. P7, 朝日新聞, 1990年11月25日
 - 12) 中田 稔, 他: 咀嚼は満腹中枢を活性化する. P1, 教育医事新聞. 第176号, 1999年4月25日
 - 13) 齋藤 滋: かむことと健康, 口腔保健シンポジウム. P14, 読売新聞, 1997年7月27日
 - 14) 朝日新聞記事: 発育期の「食習慣」で差. 脳の発育も促されます. P2, 朝日新聞, 1992年7月12日
 - 15) 大島 清: 歯は命の源泉. 歯科医学会公開フォーラム基調講演. P10, 毎日新聞, 2000年6月18日
 - 16) 朝日新聞記事: 肥満化社会. P18, 朝日新聞, 1985年1月25日
 - 17) 丸山剛郎: 噛んで健康を, 脳科学と大きな関わり. 企画特集 脳科学の世紀フォーラム. P11, 毎日新聞, 2000年6月18日
 - 18) 朝日新聞記事: 「昼寝タイム」で集中力向上. p31, 朝日新聞, 2005年10月10日
 - 19) 有益情報(ベネフィット)記事: 「夜更かし」は怖い!. なるほど教育講座, p3, ベネフ, NPOベネフ本部, 東京, 6507号
 - 20) 柴山 直: 「朝食」で得点に差. P2, 朝日新聞, 2005年4月16日
 - 21) 桜井 弘: 話す力が面白いほどつく本. 0-236, 三笠書房(知的生き方文庫), 東京, (発行年記載なし)
 - 22) 高山秀武: 話の面白い人, つまらない人. 0-223頁, PHP文庫, 東京, 2005
 - 23) 樋口裕一: 頭がいい人, 悪い人の話し方. 初版58刷, 0-219頁, PHP新書, 東京, 2005
 - 24) 明倫短期大学学生相談室編: 学生心得. 第4版, P 5, 明倫短期大学印刷, 新潟, 2005
 - 25) 切替一郎: 音声言語医学の源流と我が国における発展-前編-, 19世紀中葉より日本音声言語医学会誕生(1956)までの約100年間について. 音声言語医学, 27: 178-189, 1986
 - 26) 田口恒夫: 言語障害治療学. 1版6刷, 214頁, 医学書院, 東京, 1972
 - 27) 徐克, 李連杰, 他: 黄飛鴻之二 男兒當自強(邦題名: 天地大乱, Once upon a time in China II). 香港映画製作, 1992
 - 28) 河内十郎: 講座心理学8. 八木晃監, 東洋編, 第1版4刷, 54-59頁, 東大出版会, 東京, 1973
 - 29) 脳科学者澤口俊之氏が語る“知育一辺倒に危険の芽”. 聞き手: 私の暴力論(2)・朝日新聞社企画報道室・永栄潔, 朝日新聞, 2001年8月15日
 - 30) 川島隆太: 5分間脳活性化法. 第1版5刷, 144-148頁, 大和書房, 東京, 2004
 - 31) 伊東節子: 口の中の異常と言語障害. 明倫歯誌, 6: 39-44, 2003
 - 32) 伊東節子: 口蓋裂患者の言語障害と治療. 第1版, 1-183頁, クインテッセンス出版, 東京, 1983
 - 33) 伊東節子編著: 口唇・口蓋裂患児のことばの相談室. 第1版第2刷, 1-195頁, 医歯薬出版, 東京, 1995
 - 34) 伊東節子編著: 口腔顎顔面領域の異常と言語障害. 第1版, 1-172頁, 医歯薬出版, 東京, 2001